
ありきたりな恋

yue

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありきたりな恋

【Nコード】

N49230

【作者名】

yue

【あらすじ】

どこにでもあふれてる恋。
でもみんなちがう。

たくさんの気持ちとたくさんのエネルギーを使って人は恋をするの。

恋はどこにも同じものはない。マニュアル。そんなのも当てはまらない。

だからみんな全力で恋をするの。

恋は、どんな形にかわっていくの？

プロローグ

愛してる。ありきたりだけどこんなにも思ったことないよ。

どうしていきなり気持ちは消えちゃうの？

まだ理解できない。

ううん。本当はわかってる。でも分かりたくないの。気付きたくないの。私の何がいけなかったの。知りたい。

私の何がその子に劣ったの？

どうしてその子の隣にいるの？昨日までそこには私がいたのに・・・

すまない。

何度あやまつても足りないのは分かってる。でもどうかあいつを恨まないでくれ。

すべては俺が悪いんだ。俺があいつを好きになった。だからどうかおまえは他の奴と幸せになっしてくれ。

ごめんなさい。

私も彼が好きだった。あなたの隣にいる彼をずっと見てた。誰かを傷つけてもこの気持ちは譲れない。彼が私のほうを向いたとき、見ているだけじゃ我慢できなくなった。欲が出た。私が彼の隣を歩き

たい。同じものを共有したい。
ごめんなさい。だから彼の隣にいたい。

どうして

それが許せると思うの。なんで謝ったりするの。そんなの傲慢で偽善よ。本当にすまないと思うなら視界から消えなさいよ。謝ればあなたたちの罪悪が薄れてあの子は許せない自分を苦しく思うわ。卑怯よ。別れるまでそんな関係じゃなかった？それが何の慰めになるの？それであの子が救われる？救われないわ。

サイテーだな。

お前もお前の女も。

言葉だけだ、自分たちはいいよな、そうやって多少気まずい思いしても支えてくれる奴がいる。でもあいつは一人だ。

お前のそれは優しさなんかじゃない。なんであいつと距離を取ろうとしなかった？

別れる直前までそんな雰囲気一切出さずにいきなり言われたあいつはどう思う。

お前のそれは自分が一番楽な方法をとっただけにすぎないだろ。

お前たちに何かを言うつもりはない。
ただおれは人の感情に敏感なあいつがこれ以上痛々しくなるのが見
たくない。
だからお前らがみたくない。
それだけだ。

プロローグ（後書き）

プロローグなのかこれ？
見切り発車の電車です。
皆様お気をつけください。

第一話

「修ちゃんーん!!」

「おい、修平、犬つころが呼んでるぞ」

「ちよつと村上殺すわよ」

「こわっ!!紅、お前女のくせに殺すわよとかやめろよ。朔太郎注意しろよ」

「ちよつと男尊女卑しないでよ。村上がしおりのこと失礼なたとえ方するからじゃない」

「でもしおりは確かに犬みたいだな」

「あんた・・・彼氏のくせに・・・」

そんな会話の合間にもしおりはぶんぶんと手を振りながらこちらに駆け寄ってきた。

そして修平の腕に手をからませながら賢吾に向って

「誰が犬ころなの」

「お前」

「え、どどこ」

としおりがあたりを見回すと

「だからお前でしょ」

と賢吾が鼻めがけて指をさす。

「こらこら、しおりは直情型なんだからあんまり刺激しないで」

「修平もうなづいたろ」

「修ちゃん??」

「しおり今日もワンピースかわいいね。鞆と色合わせたの?」

「うん」

優しい笑顔に流されたしおりを見て賢吾は、

「だめだこりゃ」

と笑い、紅と朔太郎もいつものことだろうとあきれ混じりの笑顔だった。

「夢……」

見慣れない部屋で目を覚ました。

いつもと違ってせつぱつまった顔した紅の顔があった。

「しおり大丈夫？」

「紅ちゃん？」

「そうよ。私ができるわね、本当に心配したのよ」

「ここどこ？」

「保健室よ」

「なんで保健室？」

「覚えてないの？しおりキャンパス内で倒れたのよ」

「そう」

「ねえしおり？」

「私、夢見てた……幸せな夢、まだ見ていたかったな。」

「しおり……」

そこでガチャとドアが開き、賢吾と朔太郎が入ってきた。

「お前あんまびっくりりせんな」

「うん……」

「牧村、今日どうする？ここでゆっくりしてるか？それとも帰るか？どっちでもいいって言ってたぞ」

「帰りたいな」

「しおり、よかつたら私の家に来ない？」
「ありがとう、でも大丈夫だよ。お家に帰る」
「そう・・・わかったわ」
「それなら、俺の車で送るわ」
「ありがとう村上君。でも大丈夫」
「牧村、送ってもらえ」
「宗方君・・・」
「そうよ、送ってもらいなさい」
「紅ちゃん・・・」
「ついでみたいなもんだから気にすんな」
「ありがとう、じゃあお願いしようかな」
「おう、まかせろ」
といて車を正面玄関までまわすために賢吾と朔太郎は出て行った。
「じゃあ私たちも手続きしてこよう。しおりは玄関前のソファに座
ってて」
「うん、紅ちゃんありがとう」
「どういたしまして、さあ、行こう、忘れ物ない？」
「うん」
ソファで待つてるとすぐに賢吾の車が来た。
「じゃあ村上、しおりのことお願いね」
「おう」
「じゃあしおり、また明日ね。」
「うん、また明日」
しおりがシートベルトを締めたのを確認して賢吾は
「いくぞ」
「うん」
しおりは外に二人に手を振りながら返事をした。

第一話（後書き）

短い。

すみません。でも切りがいいんです。

言葉は難しいな。

暗中模索。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4923o/>

ありきたりな恋

2010年10月24日19時55分発行